

災害復興における住民の暮らしぶり格差についてのケイパビリティ・アプローチによる分析—インドネシア・アチェ州の事例

松本祐香

災害被災地の復興のプロセスにおいて、経済面、ソーシャルキャピタルや災害弱者など、各分野から様々な課題や問題が議論されている中に、復興格差の問題がある。復興格差の問題については、様々な分野から研究がなされているが、被災地の人々の暮らしぶりに焦点を当てた研究はほぼなされていない。本研究では、2004年スマトラ島沖地震で被災したインドネシアのアチェ州にて被災地域内において、地域によって人々の復興感と暮らしぶりにどのような差異が現れているのかを明らかにするために質的調査を実施し、地域によって差異が現れている原因を、個人の生活状況や活動などの事例に基づき、ケイパビリティ・アプローチの観点を用いて分析した。その結果、バンダ・アチェとアチェ・ジャヤでは住民の復興感や暮らしぶりの良さに格差が生じており、住民のレンズを通した生活再建の状況を見てみると、被災地の復興には、ハード面の復旧・復興の状況だけでは計れないケイパビリティの充足度が復興状態の良好さに影響を及ぼしていることが分かった。被災後の混乱した困難な状況の中から復興政策を設計していく上で、被災者の多様かつ多角的な考えや望みに配慮を与えることは容易ではないが、ケイパビリティ1つ1つに内在する人間の尊厳という観念に基づいた復興政策の実現のために、ケイパビリティの考え方を復興政策の基本となる政治的アプローチに組み込むことの有意義さを示している。

The difference in the level of recovery of people' s well-being in disaster hit areas  
—The case of Aceh, Indonesia—

Yuka Matsumoto

In the processes of recovery from disasters, among many issues and problems discussed from the standpoints of the economy, social capital and socially vulnerable people, there is the problem of the difference in the levels of recovery. The issue has been studied from many different fields, but studies focusing on the well-being of the people has almost never been conducted. This paper draws the results of a study conducted in Aceh, Indonesia, which was hit hard by the 2004 Indian Ocean Earthquake and Tsunami, with the aim of finding out the difference in the level of people' s feelings of recovery and well-being, and analyzes, using the capabilities approach, the causes of those differences based on the individual' s living situation and activities. The results show that, between Banda Aceh and Aceh Jaya, when viewed from the perspective of the people, there is a difference in the level of the people' s feelings of recovery and well-being that cannot be measured simply by the recovery in hardware, and that the level of fulfillment of the capabilities influence the wellness of their recovery. Even though it may be difficult to make recovery plans while giving consideration to the people' s diverse values and thoughts amidst the chaos following disasters, the study shows the meaningfulness of incorporating the capabilities approach as part of the basic political approach to realize government reconstruction policies based on the idea of human dignity, which is inherent in each capability.

Key words: disaster recovery, the capabilities approach, well-being

災害復興における住民の暮らしぶり格差についてのケイパビリティ・アプローチによる分析  
—インドネシア・アチェ州の事例—

松本祐香

1. はじめに

近年、国内外での災害被災地の復興課程において、健康被害、自然環境破壊、コミュニティの崩壊、地域経済の低迷、報道格差や風評被害など、多くの問題が発生し議論されている。その一つに、被災地域内における復興格差の問題がある。格差の現れ方は、災害因や災害の規模、社会構造、その地域の歴史や文化、自然環境条件などから育まれる地域特性などとの関連によって様々であるが、筆者自身が国内外の被災地を訪れる中で、往々にして議論がなされる物理的な復興格差だけではなく、被災地に暮らす人々の暮らしぶり (well-being) の格差にも影響を与えていることに気が付き、本研究の動機につながった。日本や世界で災害は今後も発生し続けることが確実な中で、災害からの復興を繰り返していかなくてはならない私たちにとって、被災地の人々の身体的・精神的・社会的な状態と生活への満足度などについての理解を深めることは、個人のみならず、地域社会や引いては国際社会が現代の災害時代を生き抜くためのカギとなる。

国内外の災害被災地においては、同じ被災地であっても地域によって復旧や復興状態に差異が現れていることが報告されている。本研究では、スマトラ島沖地震で被災したインドネシアのアチェ州を調査地とし、被災地域内において、地域によって人々の復興感と暮らしぶりにどのような差異が現れているのかを明らかにし、差異が現れている原因を個人の事例に基づき、人間開発の観点から分析するのにケイパビリティ・アプローチの観点が有用であることを示すことを目的とする。

2. 先行研究と本研究の意義

復興格差の問題については、これまで様々な分野からの研究がなされている。例えば、災害社会学の分野において、脆弱性の観点から、災害は潜在的に存在する社会の変化を顕在化させ、この変化を加速することが指摘されている (広瀬, 1981)。また、行政機能、商業機能、仕事、居住空間など、どの部分の機能がどの程度ダメージを受けたかによって、地域によって復旧・復興の道筋に大きな差が生じると言われる (浦野, 2010)。災害弱者の問題からは、災害以前に社会に存在していた問題が災害によって顕在化し、弱い者がより大きなダメージを受け、回復が遅れることで、災害は格差を拡大させることが指摘されている (田中, 2007)。災害情報学の分野からは、報道の格差によって支援格差が生まれること、また時に風評被害によって経済的なダメージが拡大することなどが論じられている (関谷, 2011)。また近年は、ソーシャルキャピタルの概念を通じての災害の研究も蓄積されてきており、より高い水準のソーシャルキャピタルを持つ地域が、協調した取り組みと結束した活動によって、より効果的で効率的な復興を達成しているという結果が明らかにされている (アルドリッチ, 2015)。そして経済の分野からは、東日本大震災の事例を挙げ、政府の復興への取り組みとして、大規模再開発事業などハード事業に力が入られ、被災地に住む人々の実際の生活の回復よりも、日本経済全体の成長戦略につながる方針が打ち出されることで、被災地で生活の回復が遅れる人が生まれる問題を指摘し、ハードの復興だけが重視される復興ではなく、「人間性の復興」の重要性を論じている (岡田, 2012)。

復興は、震災以前からの各地域の社会環境条件、地域コミュニティのあり方、アイデンティティなどの違いによって被害の経験は様々で、またその経験の中長期にわたる蓄積と、社会構造、政治経済システム、権力構造などの様々な社会的要因が複雑に関連し合うことによって、地域によって差異を生じると言われる (浦野, 2010)。

その中で、所得や経済指標、またハード面からの評価によって表される復興状況の差異のみならず、被災地の人々の暮らしぶりに焦点を当て、人々の復興にどのような影響がもたらされているかについての評価基準を、「人間の本质」にまで深め、多角的観点から調査し、改善策の提案を試みる研究はまだなされていない。従って、今後も災害と共生していかななくてはならない国際社会にとって重要な試みであるといえる。

### 3. 研究方法

本研究では、2004年のスマトラ島沖地震で被災したインドネシア・アチェ州にて、住民からの聞き取りによる質的調査を実施した。まず、州都バンダ・アチェと、バンダ・アチェの南東部沿岸に位置するアチェ・ジャヤ地域において、震災後の暮らしの復興感、震災前と震災後の暮らしの質についてのアンケートを行った。そして、アチェ・ジャヤの一小地域の事例を取り上げ、住民が復興課程の中でどのような問題を経験し、その中で生活を回復させてきたのか、あるいは回復が困難な状況にあるのかについて、住民の様々な活動状態について聞き、彼らの視点から語られた復興過程の暮らしの状況について、ケイパビリティの観点から分析を行った。

### 4. ケイパビリティ・アプローチ

ケイパビリティ・アプローチは、1980年代にアマルティア・センとマーサ・ヌスバウムによって開発された開発倫理学に分類される倫理的アプローチである。ケイパビリティ・アプローチでは、人が「できること(doing)」「なれること(being)」といった機能の組み合わせであるケイパビリティに着目し、人々の暮らしぶりを当事者の立場から多面的に評価する必要性を唱えた。そして、「人々が良い暮らしをするために持っている機会を評価するとともに、そうした機会に影響を与える原因となるものを調べる必要性」(セン、2000、p.24)を基にこのアプローチを世に普及させた。この考えをもとに、社会的平等や不平等を測る一つの尺度として、個人や集団にとっての自由、選択肢の広さ、多様な考え方、主体的に生きられること、そして人間の尊厳などを重視しながら、一人一人、また集団として実現したいことの目的のために、実際にどのくらいの自由と機会を有し、結果として実際にできるのかを分析・評価していくものがケイパビリティ・アプローチである。

センは、人の「生活の良さ」を見る時に重要な基礎的機能の例として、必要な栄養を摂ること、避けることのできる病気に罹らないこと、早すぎる死を回避すること、必要な教育を受けていること、雨風をしのぐ住まいがあることを挙げ、複雑な機能の例として、社会の活動に参加できること、と自尊心をもつこと、知的水準を向上させること、文化的アイデンティティを守ること、文化的アイデンティティを守ることを挙げている(セン、1999、p.59)。特定のリストは提示しないが、例えば「教育」や「災害復興」など、具体的テーマに注目するときには、注目すべき範囲を制限して分析していくことができる。ヌスバウムは、中心的ケイパビリティとして「生命」「身体的健康」「身体的保全」「感覚・想像力・思考」「感情」「実践理性」「連帯」「自然との共生」「遊び」「環境のコントロール：政治的、物質的」の10項目を参照として挙げている。本稿では、この考え方を基にアチェ・ジャヤの一小地域の事例を分析する。

### 5. バンダ・アチェとアチェ・ジャヤにおける人々の復興感に関する調査

アチェ州は、インドネシア共和国スマトラ島の北西端に位置する州である。国内でも最もイスラム教の信仰が厚い地域である。2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震では、被害が甚大であったアチェ州の死者・行方不明者及び負傷者の数を合わせると約230,000人に上った。

ここからは、バンダ・アチェとアチェ・ジャヤ地域で実施した住民の復興感に関するアンケート調査を通して、実際にどのくらいの復興感の格差があるのかを概観する。復興感の調査は、2地域において、各々の地域の人々の生活の中で、復興感にどのような差異が現れているのかを調査するために行われた。期間は2015年11月

23日から12月1日で、各々の地域において100人の20歳以上の男女に質的調査の形式で行われた。調査対象は、2004年の震災を当該地域で経験した住民に限った。質問は、自分の暮らしの復興レベルは100点満点中何点か、生活の質は震災前と震災後でどう変化したかという質問をインタビュー形式で行った。インタビューは、通訳を介し、バハサ・インドネシア語かアチェ語のいずれかで行われた。以下、調査結果を示す。

まず、図-1は、「100点満点で答えるとしたら、あなたの暮らしは災害からどの程度復興したと思いますか」の問いに対する回答をグラフで表したものである。「100点満点で答えるとしたら、あなたの暮らしは災害からどの程度復興したと思いますか」の問いには、バンダ・アチェでは80点台と答えた人が最も多く26人、次に100点の24人で、80点以上が全体の73%を占めた。一方、アチェ・ジャヤの方は、70点台と答えた人が最も多く31人で、80点以上をつけた人は全体の37%に留まった。平均値は、バンダ・アチェが82.4点、アチェ・ジャヤが71.8点で、10点以上の差が認められた。

**質問:** あなたの暮らしの復興度を100点満点で表すと、何点ですか？

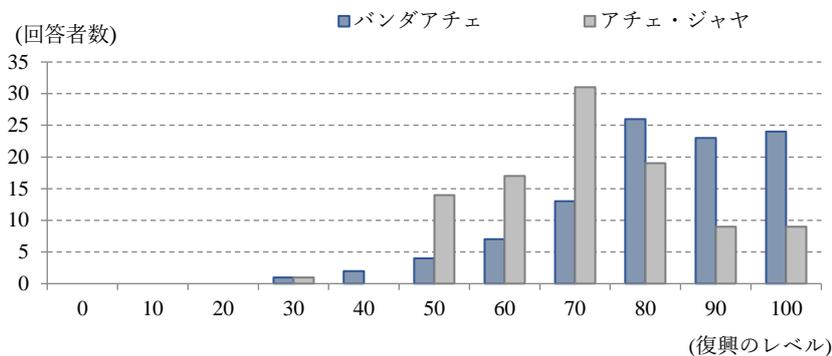


図1. 「あなたの暮らしの復興度を100点満点で表すと何点台ですか？」の質問に対する回答

次に、図2は、「あなたの生活の質は、震災前と後ではどちらが良いですか」という質問に対する回答を比率で表したものである。「あなたの生活の質は、震災前と後ではどちらが良いですか」という質問では、バンダ・アチェでは72%が「震災後の方が良い」と答え、18%が「震災前の方が良かった」と答えたのに対し、アチェ・ジャヤでは、「震災後の方が良い」と答えたのは40%で、それを上回る43%が「震災前の方が良かった」と答えた。震災後の生活の質の方が良くなったと答えた人の割合には30%の差異があった。留意すべき点は、内戦の影響がより強かったアチェ・ジャヤでは、内戦の終結を生活の質の向上の理由として挙げる住民が多く、バンダ・アチェと条件を揃えるため、その要素を差し引くと、98%の住民が「震災前の方が良い」になる。

**質問:** あなたの生活の質は、震災前と震災後のどちらが良いですか？

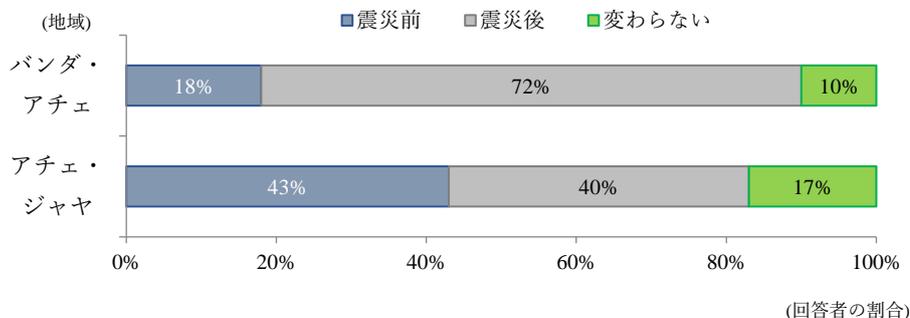


図2. 「あなたの生活の質は、震災前と震災後のどちらが良いですか？」という質問に対する回答

## 6. 漁業地区において生活の再建が難航するアチェ・ジャヤ、ラムノ村、ババ・ドゥア地区

ラムノ村の沿岸沿いのババ・ドゥア地区には、多くの漁師が居住している。震災で、殆どの住居が流されたこの地区では、住宅は他の地域と同様に政府によって提供され、経済基盤回復の支援として、漁前後の作業に必要なテビイと呼ばれる建物が支援によって再建された。しかし、何もせずにとむろする成人男性の姿が目につく。

この地区を経済的に支えるのは主に漁業である。ババ・ドゥア地区は、海へ流れ込む河口に位置する。震災後、その河の水位に変化が見られるようになり、特に乾季の水位が浅い時期は、中型の船すらも乗り入れられなくなるため、木製の小型舟しか使用することができない。そのため、漁獲可能な量が限られ、経済的に住民を圧迫する状況に陥っている。魚の販売は地区内だけだが、近所の住民は経済的に余裕のない住民が大半のため、地区内で販売しているだけでは生計が成り立たない漁師が多い。さらに、原因は判明していないということだが、震災後、海に出ても魚が全く捕れない日もあり、漁獲量は震災以前にも増してムラができていたため、収入の更なる不安定さにつながっている。そこで、漁師たちから出てきた考えが、河の水位を変えることはできない上、自然に抗って漁獲量をコントロールすることも難しい。それならば、流通を増やせば状況は良くなるのではないかというものだった。その際、それまでは内戦の影響があり、産業的にもコミュニケーションの面でも分断されていた川の対岸をつなぐ橋が建設されれば、トラックで魚を対岸の地域にも流通させることができ、販売促進につながると考えた。そのような最中、河の上流にある離れた地区で、対岸とつなぐ橋の建設が復興事業の一環として始まると聞いたため、ババ・ドゥア地区の漁師たちも提案書を取りまとめ、地元の政府に訴えようと陳情を試みたが、全く取り扱ってもらえなかった。その後、別の地区で橋が建設されることになった背景には、その地区に、政府に近い人間を知っていた人物が1人いたという事実があったことが判明した。

まず自分達の経済基盤を強化することが生活再建のためには重要と考えてきたが、漁業の再建は極めて難しい状況が続いている。漁業を生業としてきた住民にとっては他に生きていく術もなく、資本もないため復興は遅れている。作業場として政府から与えられたテビイは、漁獲量自体の減少により利用機会が乏しい。また、安全な生活のために避難塔も希望していたが、今では政府に陳情する気持ちになれず、安全な避難場所はない。

震災後のコミュニティのつながりは震災以前に比べて弱いという。震災前には、定期的にゴトン・ロヨンを行い、冠婚葬祭やイスラム教徒にとっては重要なモウリドの日の祝いも住民で行っていた。ゴトン・ロヨンは震災直後に漁師の男たちが集まってがれきの処理などにあたることがあったが、女性のアリスンやレクリエーション的な地域の活動も現在は行っていない。住民のつながりを弱めた原因を尋ねると、「震災後、住宅が支援によって建てられたが、その時に、自分は建ててもらえたが、まったく建ててもらえない住民もいた。逆に2-3軒も与えてもらっている住民もいて、その不公平感によって住民同士の信頼感が損なわれた」（漁師1、40代）、「震災後、外から大勢の移住者が入ってきて、前のような近所づきあいのようなものがなくなった」（漁師2、40代）、「お金がないから、地域のイベントを実施することができない」（漁師3、40代）という回答が得られた。

暮らしの復興度を聞くと、50点くらいと聞き取りをした漁師たちは全員が答えた。地域ごとのアンケートにおいても、アチェ・ジャヤでは暮らしの復興感はバンダ・アチェよりも低くなっており、その結果と重なる。

### ババ・ドゥア地区の事例のケイパビリティ・アプローチを使った分析

震災以前から存在していた都市部と地方の経済格差の問題に加え、アチェ・ジャヤ地域は内戦の影響が少なからずあり、流通、コミュニケーションなどにおいて外界から遮断された状態が続いたため、地域の発展から遠ざかっていた。そのことが外部からの支援を時に阻み、バンダ・アチェとの支援格差につながったとも言われる。その状況の中で、震災後の自然環境の悪化等により漁業に更なる逆風が吹き、困窮した状態から抜け出すために橋の建設を地元政府に陳情しても対応が全くなされなかったことは、住民の生活再建の過程に影響を及ぼした。

ここからは、彼らが被災後の生活再建を果たそうとする中で、重要なケイパビリティが持っていないことが分かる。それは、「自分の生活を左右する政治的選択に効果的に参加できる」(ヌスバウム、1999、p. 94) ことのケイパビリティである。ヌスバウムは、「政治的自由は、生活の良さを人間的なものにする上で中心的な重要性を持つものである」とし、「政治的自由には、物的災害(特に飢饉)を防ぎ、経済的福祉を促進するという手段的な役割がある。しかし、その役割は単に手段的なものに留まらず、それら自身が価値を持っている」(ヌスバウム、2005、p. 114)と主張し、そしてこの考えは、最終的に、人間同士としてのお互いへの敬意と関連して重要であることを主張している(ヌスバウム、2005)。また、センも政治的参加や意義申し立ては、それ自体が開発の構成部分であるという理解が重要であるとし、自由に政治に参加したり意思決定に参加する自由を奪われることは自分が大事であると思う何かを奪われている状態にあるとしている(セン、2000、p. 38)。住民が国や自治体などに意見や要望を請願することは、災害の有無に関わらず普通の国民生活の中でも行われる行為であり、また公正で十分なプロセスを経ていれば、その請願が政府や自治体に受け入れられない事案も当然のことながら結果としてある。しかし、あくまでそれは、公正なプロセスを経た上での不公平でなければならない。センは、結果だけでなく、そのプロセスも見るのが重要だと主張する。その点において、住民が生活再建の手段として必要と考えた橋の建設の要望に対応が皆無であった本事例は、正当性を欠いたものであると考えられる。ハード面の支援は、言うまでもなく被災地の再建にとって重要な要素である。しかし、それが当事者が本当に暮らしの再建に必要な形で実施されない場合は、住民の日々の暮らしの復興にはつながっていかない。

またババ・ドゥアでは、震災後にコミュニティの崩壊を経験することになった。新しい住民の流入、旧住民同士の信頼関係の悪化、会合を開くための経済的な困難などの理由から、ゴトン・ロヨンやアリサンも開催されなくなっている。調査を実施したアチェ・ジャヤ地域の他の地区の中には、新しいリーダーによって地域のつながりは再構築できているグレ・プトー地区などがあるが、ババ・ドゥアについては、人のつながりを失い、再構築できない状況が続いており、ヌスバウムが、人間らしく生きるために必須のケイパビリティとして挙げる、「他の人々と一緒に、そしてそれらの人々のために生きることができること。他の人々を受け入れ、関心を示すことができること。様々な形の社会的な交わりに参加できること。(中略)正義と友情の双方に対するケイパビリティを持てること」(ヌスバウム、1999、p. 94)を意味する「連帯」に欠如がみられる。

アチェにおいては、震災後、大量の犠牲者が出たことによりコミュニティの崩壊が生まれたケースと、震災後の国際支援団体との関わりの中で崩れていった人間関係が指摘されている。現地に2004年から3年間滞在したインドネシア全国紙の記者、また、Red Cross アチェの職員からの証言によると、震災後、アチェでは多くの国際支援団体が被災地で支援活動を行った。しかし中には、本来は地元の住民同士で協力し合いながら地域の絆の維持や相互のリスペクトを保つことに貢献していた清掃などの作業に対し、“少し掃除をすればお金をあげます”というスタンスで、住民との間で金銭的な援助体制を慣習づけてしまったため、“地域の人々のために働く”ということに価値を見出さない住民が生まれてしまった。これは“あの人は、あんなささいな仕事であんなにお金をもらえたのに、自分は少ししかもらえなかった”などという不公平感に繋がるケースも多発し、結果的に、震災で悪化した地域内のつながりを更に悪化させることにつながったという。このことが、当事者である住民たちが、自ら奮起して地域との協力体制を持とうとする内的な変化を奪ってしまった一因となる。

また、連帯の欠如からつながって、ややもすると見過ごされがちだが、復興の途にある住民にとっては大切なケイパビリティの喪失があることが分かった。それは「遊び」というケイパビリティである。地域のレクリエーション的な活動がなくなってしまった事は、住民たちが互いの心を通わせ、楽しみ、笑い、情報を交換し共有したりする機会がなくなった事を意味し、ゴトン・ロヨン、アリサン、子供の誕生会など様々なイベントを行うことによって得られる「楽しい経験をし、笑い、遊ぶ」というケイパビリティが奪われることにつながっていった。

さらに、震災後の暮らしに不可欠な自然との関わりについて、彼らが望む状態で関係性を保てていないことは、

ヌスバウムが、人間らしく生きるために必須とする「自然との共生」のケイパビリティに影響があることが認められ、震災以降の自然環境の悪化によって生業に支障が生じ、経済的基盤を再建することが困難になっている。このことは、住民達が望む様々な生活を実現する上でのケイパビリティの獲得に著しい支障をきたしている。

住民達は被災後、外国の政府支援によって住宅が提供され、インドネシア政府からはテレビが建設され、生活を再建していくためのハード面の基本的支援については、他の地域と同様な形でなされていた。しかし、その後の住民の復興感の低さや暮らしが改善しない状況からは、社会、政治への有効的な参加、経済的回復の遅れ、住民同士のつながりの不足など、楽しみの要素の欠如、自然との良き関わり合いなど、住民が良い生活を実現するために価値を置く様々な要素、つまりそれらのケイパビリティの欠如がみられることが分かった。

## 7. おわりに

ここまで、バンダ・アチェとアチェ・ジャヤの地域の暮らしの差異と、暮らしの復興がバンダ・アチェに比べ遅れているアチェ・ジャヤ地域のババ・ドゥア地区の人々の暮らしについてみてきた。ババ・ドゥア地区については、震災後に住宅支援や作業場の建設など、ハード面での基礎的な支援があり、生活の再建が徐々に進むことが期待された。しかし、実際に彼らの暮らしをケイパビリティの充足に焦点を当てて多面的に見てみると、震災から10数年が経過しても、住民の生活の質には、生業の再建の失敗、自然との共生の困難、人とのつながりの弱体化、家族に適切な教育を与えることが出来ない、楽しみの喪失など様々な問題が存在し、彼らの望む被災後の生活は実現できていないことが分かった。つまり、住民のレンズを通した生活再建の状況を見てみると、被災地の復興にはケイパビリティ・アプローチにおいて重要とされる因子が重要であることが分かった。

復興課程においては、政府側からの働きかけだけではなく、当事者を行為者として復興政策に取り込み、これに基づいて、復興に関わりのあるアクター達が、短期的視点だけではなく中長期の視点で継続的に、支援側の事情によるハード面の支援だけに囚われることのない復興政策を模索することにより、より良い復興につながる可能性がある。これは、災害復興プロセスを受動的なものではなく、被災者の主体的かつ、被災者との協同による活動である必要性を認識することを改めて示唆している。災害被災地の再建のプロセスにおいて、支援を提供する政府側、関連機関と住民のコミュニケーションを通した信頼の構築と協働体制が不可欠であるといえよう。

## 参考文献

- [1] 広瀬弘忠(1981) 『災害への社会科学的アプローチ』新曜社。
- [2] 浦野正樹(2010) 「災害研究のアクチュアリティ—災害の脆弱性/復元=回復力パラダイムを軸として」『環境社会学研究 16』, pp. 6-18, 環境社会学会。
- [3] 田中重好(2007) 「伊勢湾台風」, 浦野正樹・大屋根淳・吉川忠寛編『復興コミュニティ論入門』(シリーズ災害と社会)pp. 224-244, 弘文堂。
- [4] 関谷直也(2011) 『風評被害—そのメカニズムを考える』光文社。
- [5] アルドリッチ, D・P(2015) 『災害復興におけるソーシャルキャピタルの役割とは何か—地域再建とレジリエンスの構築』石井祐・藤澤由和訳, ミネルヴァ書房。
- [6] 岡田知弘(2012) 『震災からの地域再生—人間の復興か参事便乗型「構造改革」か』新日本出版社。
- [7] セン・アマルティア(1999) 『不平等の再検討—潜在能力と自由』池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳, 岩波書店。
- [8] セン・アマルティア(2000) 『自由と経済開発』石塚雅彦訳, 日本経済新聞社。
- [9] ヌスバウム・マーサ・C.(2005) 『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳, 岩波書店。
- [10] Nussbaum, Martha C., 1995. *Poetic Justice: The Literary Imagination and Public Life*. Boston,

MA: Beacon Press.